

食材をアピール

延岡で商談会



東京、大阪などからバイヤー

10/18

農林水産業者 自慢の産物紹介

延岡市農林水産物現地商談会（同市水産物産地販売強化推進協議会主催）が15日、エンシティホテル延岡で開かれた。地元の農林水産業者らが出展し、大都市圏から延岡の魅力ある食材を求めて参加したバイヤーらに自慢の農林水産物などを売り込んだ。

延岡産の農林水産物や特産品を情報発信し、販路拡大につなげるため、市は首都圏などで開かれる商談会への出展や、品

目の磨き上げに向けたコーディネートやバイヤーを招聘（しようへい）する事業に取り組んでおり、現地商談会の開催はその一環。

地元からは漁業や農業、水産・畜産加工業、製茶、食品、酒造業など17事業所が出展。バイヤー側は、地域の食材や商

品情報を求めて東京を中心に大阪、沖縄などの農水産物卸やホテル、デパート、飲食店、食材調達業者ら13事業所が来場した。

各ブースには、メヒカリやちりめん、空飛ぶ新玉ネギや釜炒（し）り茶、薫製やワインナー、むかばき地鶏、焼酎などが並び、地元参加者が商品の魅力を説明。バイヤーは会場を巡って試食で味を確認したり、加工に対する要望をアドバイスするなど、意見を交わしていた。

東京デイズニースイートオフィシャルホテル第1号フラザサルート」（千葉県）の日本料理調理課長石川隆輝さんは、「宮崎フェアを毎年開いているので、名物を探してきた。メヒカリの空揚げがおいしかった。まだ東京ではあまり食べられてないと思うのでね」と笑み。

ちりめんやメヒカリを出展したマルナカ海産（土々呂町）の高島美保さんは、「これまで市場に直接出荷していたが、小売りなどへの挑戦を始めたところに話を受けた。表示の方法など貴重なアドバイスは勉強になる。機会があればまた参加したい」と話し、北浦町の巻翌日は来延、伊予、土々呂町の水産加工業者などを見学した。

自然を体感、理解深める

10/18
貴重な自然
や動植物

北川湿原で観察会

延岡



延岡市北川町の家田地区と川坂地区に広がる北川湿原を巡る「北川湿原観察会」が14日あり、市民ら約40人が貴重な自然や動植物への理解を深めた。

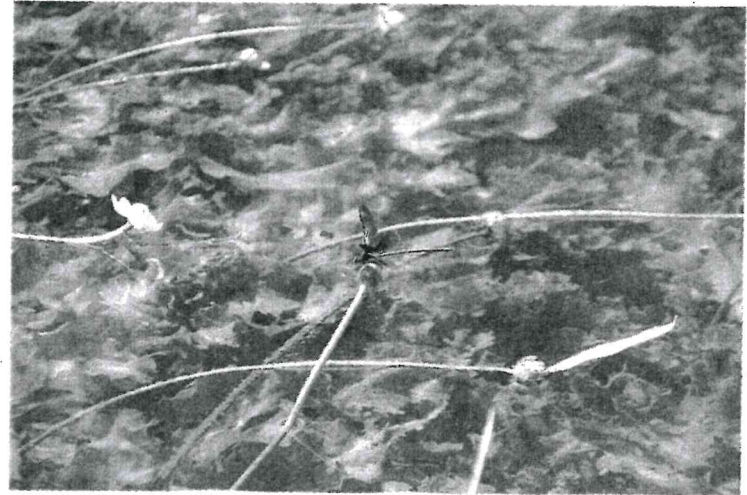
同湿原は「日本の重要湿地500」や「ラムサール条約湿地潜在候補地」「県の重要生息地」に指定され、絶滅危惧種の動植物50種以上が生息する湿地。市と地元を守る会は、貴重な自然を体感してもらおうと年2回の観察会を実施している。参加者は、県環境保全

アドバイザーの成迫平五郎さん(76)の案内の下、約3キロの行程を散策。今回は川沿いだけでなく湿原東側の山道にも足を延ばし、違った視点からの観察も行った。

成迫さんは道中、湿原に広く生育しているタデ科のナガバノウチギツカミヤサデクサ、ヌカボタデなどを紹介したほか、山道沿いではマルバウツギやリョウブなどにも触

れながら北川の自然の魅力を伝えた。

また代表的な観賞スポットの「やまはな橋」では、水面に咲くように分布する鮮やかな黄色の



ハグロトンボとコウホネ

コウホネや周囲を飛び回る真っ黒なハグロトンボなども目にするのができ、参加者の目を楽しませた。

南一ヶ岡から来た山口凌彦君(5)は「トンボがいっぱい飛んでいて面白かった。写真もいっぱい撮れた」と笑顔。母親の宏子さん(45)は「地元にもこんなに豊かな自然があることが分かってうれしかった。ぜひまた参加したい」と話した。

漢方原料 地域産業に

延岡に農業法人発足

1/8 サンシユユの実を初収穫

漢方原料の栽培を地域産業に育てようと、県内有志が延岡を拠点に農業法人アグリセビエア（9人）を発足させた。17日には北川町のほ場で栽培する山茱萸（サンシユユ）の実を初収穫した。木村高治社長らは「これから仲間の農家を増やして規模を拡大し、高収入を実現したい」と意気込んでいる。

付くのが3週間ほど遅れ、本格的な収穫はこれからだが、スタッフは来春の出荷を楽しみにしながら作業に当たっている。

増産用の苗木も順調に育っており、12年後までに自社分だけで栽培面積を173畝、出荷量を126トンまで拡大する計画。現在は地元説明会を

開いて契約農家も募っている。サンシユユは病気に強く長寿命で、イノシシやシカに実を食べられるなどの鳥獣害もなく、放置状態で育つと木村社長。2、3月には無数の黄色い小さな花を咲かせ、景観も栄えるという。過疎化で休耕田や耕作放棄地が増える中、同社は契約農家だけでなく農地提供者も募集。将来的

には作付面積を1500畝まで拡大し、サンシユユの産地化を目指す。同社は「サンシユユを観光資源にも生かし、農業へ魅力や知名度を高め、郷里を離れた担い手のUターンや新規就農移住者の呼び込み、集落再生のお役に立てれば」と、賛同を求めている。問い合わせはアグリセビエア（☎延岡38・0880）。



赤く実ったサンシユユ

同社によると、サンシユユは国内でも古くから医療薬品に用いられている。シユユは中国に広く分布し、療養・市販治療薬に使

用。だが現在、製薬会社が医薬品に用いているのは全て輸入品で、国内では実質、商業栽培はされていないという。

以前から北川町にサンシユユの木があるのを知っていた木村社長が、製薬会社の協力で果実を分析したところ、薬の主成分となるロガニンの含有量が、国内での使用基準値や海外産よりもはるかに高いことが判明。良質な国内産を求める大手2社への販路を築いた。

ほ場では22・8畝で約800本を栽培しており、収穫後は種を取り除いた果肉だけを乾燥。出荷量は約1トを見込んでおり、1畝当たり1500円以上で買い取られるという。

今手は夏場と気温が高



北川町のほ場で行われた収穫作業